

2 - 5 - 2 （岐阜城） 史跡の概要

岐阜城跡は、金華山（稲葉山）に築かれた山城で、稲葉山城、井口城とも呼ばれていた。戦国時代に美濃国を治めた斎藤氏の居城であるとともに、織田信長が天下統一の拠点とした城としてもよく知られている。

建仁年間（1201～1203）頃に二階堂氏が最初に城を築いていたと言われているが、実態は不明である。大永5年（1525）頃、ここが守護方と長井氏の争いの舞台になったため、少なくともこのころには城として利用されていたと考えられる。天文5年（1536）には斎藤道三が拠点としていたことが分かり、以後は義龍・龍興と、斎藤氏3代の居城となった。永禄10年（1567）、斎藤氏を追放し美濃を攻略した信長が、城に大きく改修を加え、岐阜城と名を改めた。その後、慶長5年（1600）の関ヶ原合戦の前哨戦で落城し、廃城となっている。

信長入城後の改修には、石垣のほか巨石列を用いるなど、その構築技術に近世的な要素がうかがえる。また、ポルトガル宣教師ルイス・フロイスや京都の公家である山科言継等の訪問記録が残されている点、山麓では貴重な庭園遺構群が見つかっている点も、岐阜城跡の特徴と言える。

岐阜城の城域は、ほぼ現在の金華山国有林の範囲に相当し、山麓居館を含めた約209ヘクタールが史跡指定範囲となっている。居館跡や自然地形も含めて、山全体が城として機能していたことが分かる。

説明板より